

鈴木ヒラク かなたの記号

言語と空間 | Langue and Space vol.1



Hiraku Suzuki Signs of Faraway

青森公立大学国際芸術センター青森 [ACAC]

Aomori Contemporary Art Centre [ACAC], Aomori Public University

言語と空間
Langue and Space

vol.1

鈴木ヒラク
「かなたの記号」
Hiraku Suzuki
Signs of Faraway

03	アーティストステートメント 鈴木ヒラク	Artist statement, Hiraku Suzuki
04	彼方をつなぐ—— もうひとつの言語としてのドローイング 服部浩之	07 Bridging Beyond Boundaries – Drawing as Another Language Hattori Hiroyuki
09	図版	Plates
25	作品リスト・解説	27 List of works / Explanation
28	アーティスト略歴	30 Biography

謝辞 | Acknowledgements

本プログラムを開催するにあたり、ご協力いただきましたすべての方に深く感謝をし、心からお礼申し上げます。
We would like to take this opportunity to extend our sincere gratitude.

柴山奈津美 | Shibayama Natsumi

鈴木美希 | Suzuki Miki

田中有紀 | Tanaka Yuki

豊澤千幸 | Toyosawa Chiyuki

凡例 | Notes

- 1 出品作品の図版キャプションは、作品名を記し、詳細は作品リスト(25-27頁)に記した。
 - 2 人名はフルネームで記載する場合の姓・名の順は、特に指定がない場合は各言語における標記の順に従った。
 - 3 出品作品図版およびポートレートの撮影は、特に記載されている以外は、小山田邦哉による。
ただし、活動スナップやイベントなどの撮影はその他の撮影者を含む。
 - 4 文中、作品名は《 》、展覧会名は「 」、書名は『 』で示した。
 - 5 アーティスト略歴は、アーティストより提供のあった資料に基づき編集・作成した。
- 1 For each work exhibited in the color page, the basic information provided is the title (Japanese, English), more detailed information of the works, is given in the "List of Works" (p.25-27).
 - 2 Full names (ie. family name + first name) are written in their original orders, except the artist name "Hiraku Suzuki."
 - 3 Color plates of the exhibited works and artists' portraits without credits were photographed by Oyamada Kuniya, except for those showing snapshots of activities and events.
 - 4 Titles of art work, exhibitions, and books are written in italic.
 - 5 Artist's biography was compiled on the basis of publications and references provided by the artist.

ドローイングは、絵とことばの間にある。かつて、“描く”と“書く”は未分化であった。古代人は、いわゆる言語を使い始めるずっと前に、そこら辺に転がっている石や、洞窟の壁や、マンモスの牙に、天体のリズムを刻んだ。人間はそうして記号を発明し、文字や言語を生み出すことによって、常に未知なるものとして目の前に立ち現れてくる世界の中に自らを位置づけ、世界を研究し、世界と関わり合いながら生き延びてきた。いまここを生きる私たちは、既存の言語の概念だけで、この世界の新しい時間と空間の広がりの中で起こっていることを十分に理解し、未来を指し示すことはできるだろうか。

僕の方法論は、この現在進行形の世界に対応した、もうひとつ別の考古学としてドローイングをとらえてみることだ。まず既に遍在している亀裂から世界に入り込み、世界を点と線に解体することからはじまる。

例えば路上にゆらぐ木漏れ日の形や、アスファルトの白線の欠片や、葉脈のカーブ、読めない数式、グラフィティ、肌に浮いた血管、ビルの輪郭、中国の棚田の地形、地下道での靴音の響き方、獣道、レコードの溝、熱帯植物の枝振り、車のヘッドライトの残像、SF映画のシーンに一瞬映る看板に描かれた架空の会社のロゴマーク、飛んでいる蚊が空間に描く軌跡。

そこにある点と線をよく見る。反対側からも見る。そしてなぞる。身体を使う。再配置する。何か現象を起こす。繰り返す。

こうして、解体された世界の欠片をつないで、新たな線を生む。この線は、“いまここ”と“いつかどこか”を接続する回路となる。その回路を行ったり来たりするのは、絵でもことばでもない、ただの記号である。このただの記号を、変化し続ける現在において発掘すること。僕の仕事は、離ればなれになってしまった“描く”と“書く”のあいだの闇、そのかなたに明滅する光の記号を見だし、獲得し続けることである。

鈴木ヒラク

Drawing exists between pictures and language. In fact, drawing and writing were once one and the same. Long before we began using what we now know as language, the ancients etched the rhythms of the stars into mammoth tusks, onto cave waves, and across the face of ordinary stones. This is how humans invented signs. Letters and language were developed by humans to orient themselves within a world where the unknown is constantly present. And we have managed to survive as a species by using language to better study and relate to our world. But is anyone living today capable of fully grasping new occurrences within our world's ever-growing expanse of time and space and pointing to the future with only our existing concept of language?

My methodology interprets drawing as an alternative archaeology that corresponds to our world in the present progressive. I begin by first slipping into the world through the ubiquitous cracks that already exist and deconstructing them into dots and lines. Take, for example, the wavering shapes of the sunlight as it filters through the trees onto the ground, the chipped white lines in the asphalt, or the curving veins of a leaf. An indecipherable mathematical formula, graffiti, veins bulging through the skin, the outlines of buildings, the topography of a rice terrace in China, the sound of footsteps echoing in an underpass, and an animal's trail. The grooves on a record, the branches of a tropical plant, an afterimage induced by car headlights, the fictional company logo seen for a fleeting moment on a billboard in the scene of a science-fiction movie, the path of a mosquito flying through space.

I look at the dots and lines within them. I look at them from forward and behind. I trace them. Use my body. Recompose them. Produce an effect. Repeat.

In this way, I connect fragments of the deconstructed world and generate new lines, which become the circuit that connects the here and now with the somewhere, someday. Neither pictures nor words can be transmitted in this circuit. Only signs can. I excavate the signs in the ever-changing present moment. My practice is to discover and acquire flickering signs of light in the faraway, in the dark and widening gap between drawing and writing.

Hiraku Suzuki

服部浩之(青森公立大学 国際芸術センター青森[ACAC]学芸員)

鈴木ヒラクは、いわゆる線描画のみでなく壁画や写真、映像、鋳造など多様な媒体による表現行為の総体をドローイングと定義する。それは我々が通常用いる言語とは別の方法で、世界を捉え、共有可能な普遍性を備えた新たな言語のようなものを獲得する試みと言えるかもしれない。

「光の現象」と「反転」は、本展を読み解く重要な鍵であり、空間のシークエンスは光と闇のネガポジ反転[1]の連続で構成されている。鑑賞者は薄暗いエントランスの先にうっすらと照らされる作家のステイトメントをまず目にし、振り向いて展示室に入ると上部の水平窓から外光が降り注ぎ白く照らし出された湾曲する巨大なヴォイド空間に行き当たる。水平窓向かいの全長約55mの壁面は、シルバーインクで描かれた壁画《歩く言語》に覆われている。その反対側には、鈴木が収集した古今東西の博物館のカタログに掲載された遺物の輪郭をトレースしてステンシルをつくり、シルバーのスプレーを吹き付けることで遺物の形態を取り出した《casting》91点が一行に整然と並べられている。また、湾曲壁と交わる両側の側壁面には対称形に渦を巻く《Circuit #6》と《Circuit #7》が設置されており、時空間が反転するような錯覚を生む。

湾曲するヴォイド空間を抜けると明暗が反転し仄暗い小部屋に至る。ここには黒い紙にシルバースプレーなどで即興的に描いたドローイング《GENZO》シリーズを撮影し写真に変換した《GENZO(写真)》84点が壁面に並ぶ。写真とは光によって記述する行為であり、ドローイングは光学的変換を経て複製可能な写真となる。原画と写真はネガポジの関係にあるのだ。行き止まりのこの小部屋から引き返し再び明るい回廊空間を通り抜け、一旦屋外へ出て向かいの展示室に至ると、そこには最も深い暗闇が広がる。トーチを手にし、再び洞窟へと入るように暗闇に潜る。入口脇の壁面には、宇宙空間に描かれたかのように中空で変化し続ける巨大なドローイング《GENGA#001-#1000(video)》が目に入る。また正面壁をトーチで照らすと、発光する宇宙人のような得体の知れない《鍵穴》が存在する。これは光を正面に再帰反射するリフレクターにより形成されたドローイングで、鑑賞者が光を向けることで自ら発光するかのように振舞う。さらにその向かいの暗い壁面には《GENZO #1》と《GENZO #2》が設置されている。光で照らすことにより部分が際立ちスプレーの飛沫や線の躍動感などを強く感じられる。トーチの光とともに経験するこの空間は地下の洞窟のようであり、同時にはるか空の彼方の宇宙空間の様相をも呈する。

ところで、鈴木のだローイングにおけるネガポジ反転という発想は、マイケル・ハイザーによる大地を幾何学的に掘削するランド・アート作品群を想起させる。ハイザーの大地を掻き取り巨大な線を刻む減算のだローイングは、紙上に画材をのせて描く加算的なドローイングに対してネガ的に反転したあり方だ。《歩く言語》において、作品に取り込まれるようにその内部に没入する感覚や、少し距離を置いて

俯瞰し移動することで身体的に知覚する作品体験は、ランド・アートの経験と極めて近いものだ。ハイザーが大地に刻印するなら、鈴木は光の現象により中空に刻印すると言えよう。

《歩く言語》は、鈴木が短期間の滞在制作により描いたもので、そのドローイングの真髓がよく反映されている。鈴木は壁画は、空間に触発され、対話するように、その瞬間にその場で描かれるものだ。約100年前にワシリー・カンディンスキーは当時の先鋭的な音楽に強い影響を受け一連の《インプロヴィゼーション》や《コンポジション》のシリーズを生み出したが、まさに鈴木はドローイングにおいて即興（インプロヴィゼーション）と構成（コンポジション）は要だ。カンディンスキーによる点と線と色彩による暗示的で記号性の高いドローイングは、抽象画という新しい表現の方法論を切り開いただけでなく、同時に太古の人類が洞窟に残した壁画がもつようなイメージの喚起力と普遍性を備えている。一方で、鈴木は運動と光によりその様相が変化する壁画は、遙か昔から存在した象形文字のように、あるいはいつか生まれる新たな言語のように見えるなど、遠く離れた過去と未来を結びつける。また、鈴木はドローイングも音楽的な側面をもつ。《歩く言語》において、その瞬間における描線は即興演奏に近いカタチで瞬間的な応答として起こるが、同時にその作品構造は論理的で豊かな構成力をもつ。鈴木は、この空間の水平に流れる回廊性を強く意識し、五線譜のように基底となる水平線を最初に描く。そしてそこに、点や線による様々なラインを加え、文字やもののカタチを想起させるような記号群が形成されていく。全体を見渡し、密度の変化を与えリズムをうむように、部分的にさらに水平線が加えられていく。これらシルバーで描かれたラインは、向かいの壁面上部の水平窓から降り注ぐ自然光を反射する。鑑賞者は移動することで、少し先にみえるその光を追うように壁面に見入る。次に振り返ると今度は背後に光を発する記号が存在し、光に追われる感覚をも覚える。このシルバーのラインは、光との関係において、ときに白く輝き、ときに黒く刻印される。同じ描線が光により、刹那の存在にも、古くからそこに刻まれていた原初的な存在にも感じられ、その在り方も次々に反転していくのだ。

一方で《歩く言語》は、ことばのもつ視覚的側面である物質性や具体性に着目し空間化を試みたコンクリート・ポエトリーなどをも想起させる。光の現象を与えることで、そのうえに相互性と変質性を備える《歩く言語》は、コンクリート・ポエトリーのさらに少し先にある視覚的な言語表現を探索するものとも言えるかもしれない。

鈴木は、ことばと絵、光と闇、あるいは過去と未来など、遠い地点にあり容易には繋がらないと思われる事象を、そのあいだに散らばる様々な切片を手掛かりとして、そこに多様な線（ライン）を見出し接続していく。その態度はまさに考古学のそれであり、この世界を紐解くひとつの方法であろう。このような態度をドローイングと定義する鈴木は、現実にしてメタフォリカルに線を描き様々な反転を起こすことで、まさに「いまここ」と「いつかどこか」を接続する回路^[2]を築くべく、世界に問いを投げかけ、同時に世界を解明する独自の言語を探索し続けていくだろう。

1——鈴木ヒラクは「ネガポジ反転」という表現を度々用いる。 2——鈴木ヒラクのステイトメントより抜粋。



Hiraku Suzuki's definition of drawing is broad. He uses the word to encompass the whole of creative expression, extending beyond line drawings to include murals, photography, video, casting, and a variety of other media. He sees drawing as a challenge to generate a new and universal language through which to share and interpret our world, a means of communication entirely separate from the conventional languages we use day in and day out.

–

The phenomenon of light and its inversion are the two major keys needed to decipher Suzuki's exhibition, and the entire sequence of his exhibition space is structured around a series of negative inversions^[1] of light and darkness. Visitors are first greeted with the artist's dimly lit statement printed just inside a dark entrance. As they turn and enter the exhibition space, they are met by a vast, curving void, illuminated in stark white by high bay windows that run along the upper wall for the length of the 55-meter-long space. The windows shine on Suzuki's mural *Walking Language*, which covers the opposite wall and is drawn in silver ink and spray paint.

–

Just below the windows, 91 silver stencils neatly adorn the wall in another of Suzuki's works: *casting*. Suzuki traces the shapes of artifacts from the pages of museum catalogues he has gathered from places around the world. He then sprays silver over the stencils until only the contours of their former selves remain. Meanwhile, artworks *circuit #6* and *circuit #7* generate an illusion of time and spatial reversal, swirling parallel to one another at either end of the space's arc.

–

Past the curving void, the contrast flips as visitors enter a small, unlit room. Here 84 pieces of Suzuki's *GENZO* series line the walls. Each piece is an impromptu drawing of

silver spray paint on black paper that has then been converted into a photograph. The act of photography, or depiction with light, is seen as a method of optical conversion that can render his drawings replicable. And so Suzuki inverts the relationship of the original drawings and the photographs.

–

Visitors must return the way they came: from the dim room back into the bright corridor, and then outside toward another exhibition space across the way. The deepest darkness of the exhibition awaits just inside. Armed with only a flashlight, visitors are immersed in the dark, cavernous space. On the wall beside the entrance is *GENGA #001 - #1000 (video)*, Suzuki's massive collection of drawings, which transforms midair as if suspended in space. On the wall ahead, visitors use their flashlight to illuminate *Keyhole*—the drawing of an amorphous, luminescent alien figure. *Keyhole* appears to glow magnificently, as it is made up of reflective strips of material that shines light directly back at the source. On the dark wall opposite *Keyhole* are *GENZO #1* and *GENZO #2*. The dynamism of the artist's flecks and lines come sharply into view when illuminated. A single flashlight as the visitor's only source of light, the entire exhibit can feel like an underground cave and the farthest reaches of space.

–

Suzuki's notion and application of negative inversion in his drawings is reminiscent of land art pioneer Michael Heizer, whose subtractive drawings extract geometric patterns by scraping gigantic lines in the earth. Heizer's land art is guided by a negative reversal of traditional drawing, which adds material to blank paper. The physical experience of Suzuki's *Walking Language* is extremely similar to that of land art; visitors can gain a sensation of being surrounded or absorbed into the work, or they can put distance between themselves and the artwork to gain a bird's eye view. If Heizer sculpts the land, then Suzuki undoubtedly sculpts space with light.

–

The essence of *Walking Language*, which Suzuki drew in his short period of resident

production, is readily apparent to the viewer. The mural is inspired by the space, created as a dialogue between the artist and the space in a specific moment of intimacy. Almost 100 years ago, the progressive music of the era profoundly influenced Wassily Kandinsky to create his series of *Improvisations* and *Compositions*. Likewise, both improvisation and composition are essential to Suzuki's work. Kandinsky's drawings, whose dots, lines, and colors gave them a highly suggestive and symbolic nature, not only pioneered abstract art—a completely new mode of expression—but they also possessed the same provocation and universality of the murals our ancient ancestors drew on cave walls. Suzuki's murals, which transform with light and the artist's movement, seem to connect the distant past with the future, as if either inventing a new language or rediscovering some ancient hieroglyphic script.

Moreover, Suzuki's drawings also possess musical aspects. The lines of *Walking Language* emerge as the impulsive response of an impromptu performance. Yet the work's structure is both logical and constructive. Suzuki is strongly aware of the space's horizontal expansion as a corridor, so he first lays the foundations of the artwork's metaphorical staff with horizontal lines. These lines and dots are then joined by a swarm of signs evocative of letters and other objects. When viewed as a whole, the density of the lines generates rhythm throughout the piece. The silver reflects the natural light that pours in from the bay windows. As visitors move through the piece, light moves in front of them, guiding them and drawing their gaze and attention to the mural. Behind them, they also find that light illuminates the mural. The viewer feels as if light is both guiding and tracking them at the same time. Moreover, the light causes the silver ink to shine white at times but appear engraved in black at others. Similarly, it also causes these same lines to shift between ephemeral existences and primordial entities that have long been etched into time. In this manner, their appearances are inverted time and again.

Walking Language is even evocative of concrete poetry, the endeavor to spatialize the tangible, concrete nature of language's visual aspects. Moreover, Suzuki may even be pursuing a mode of visual linguistic expression beyond that of concrete poetry, since the piece assumes reciprocal and transformative qualities with his application of light.

Suzuki discovers lines to connect the dichotomies of language and picture, light and darkness, and past and future, picking up and connecting the many pieces scattered between them. His approach is one that he describes as "alternative archaeology," a new way in which to interpret our world. To Suzuki, drawing delineates this kind of attitude. His real and metaphorical lines induce a variety of inversions that build a "circuit that connects the here and now with the somewhere, someday."² There is no doubt that Suzuki will continue to question our world and shed light on it through the pursuit of a language all his own.

Hattori Hiroyuki

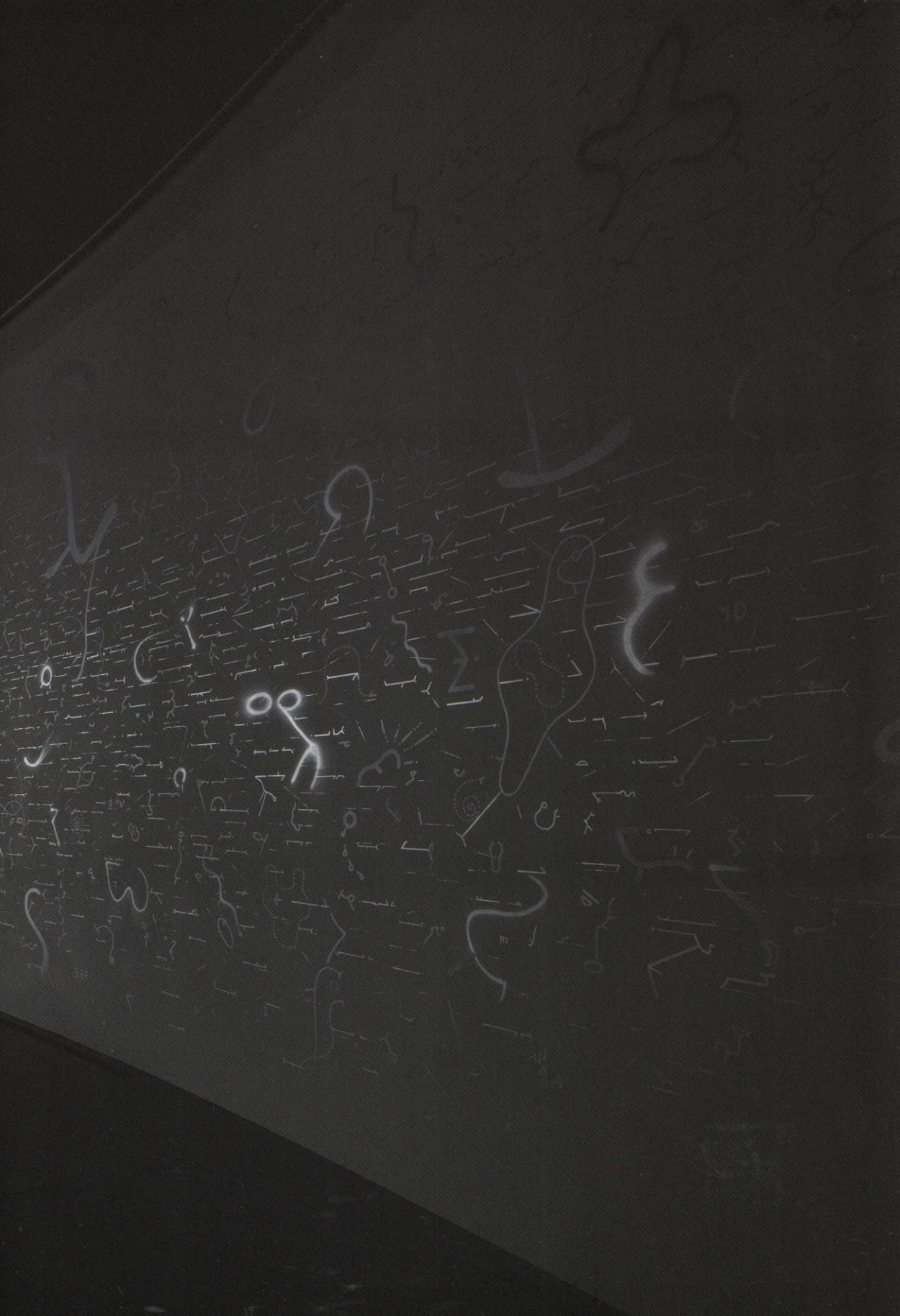
(Curator, Aomori Contemporary Art Centre)

1 — Hiraku Suzuki often uses the term "negapoji hanten" in reference to his technique, translated here as "negative inversion"

2 — Quoted from Hiraku Suzuki's statement.

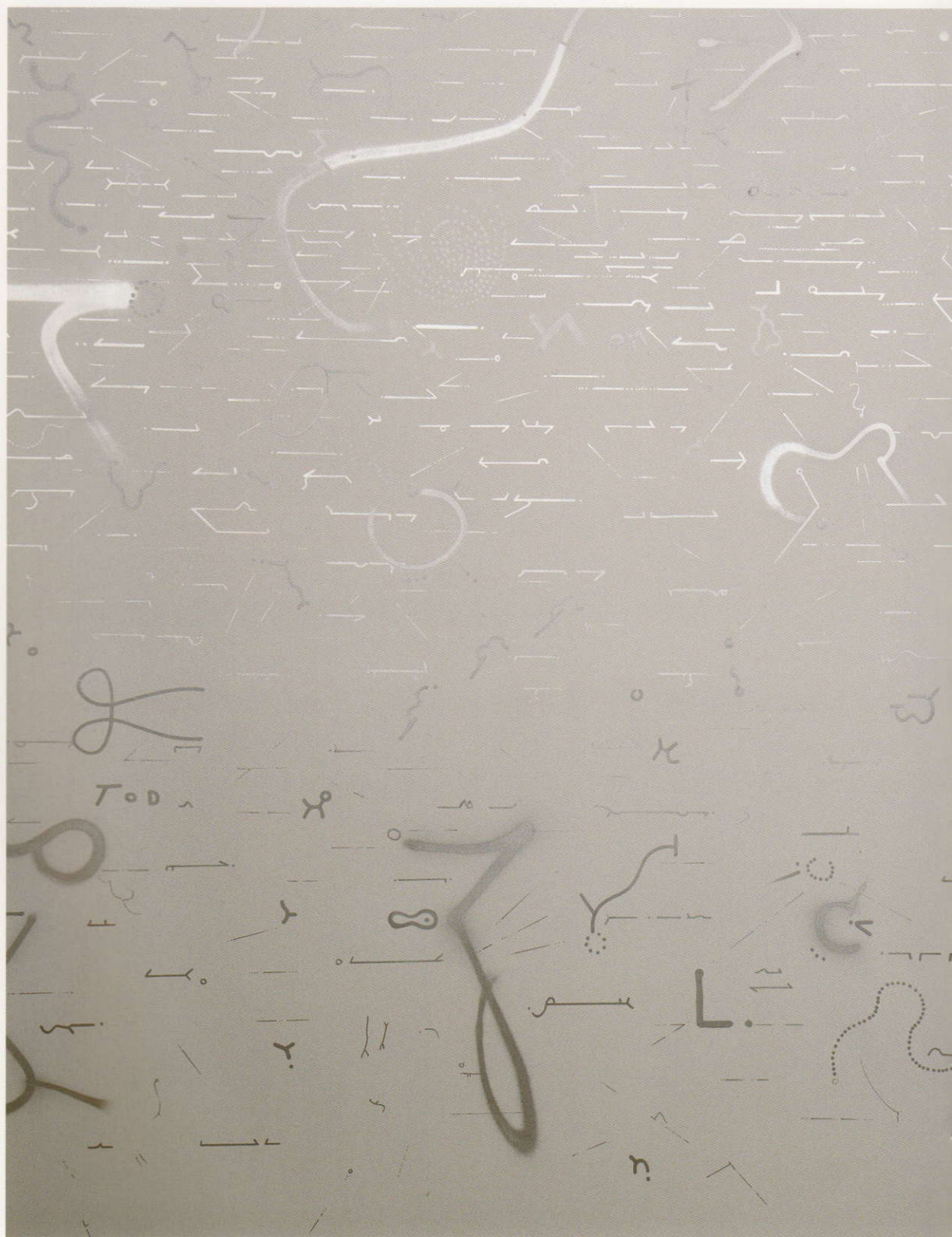


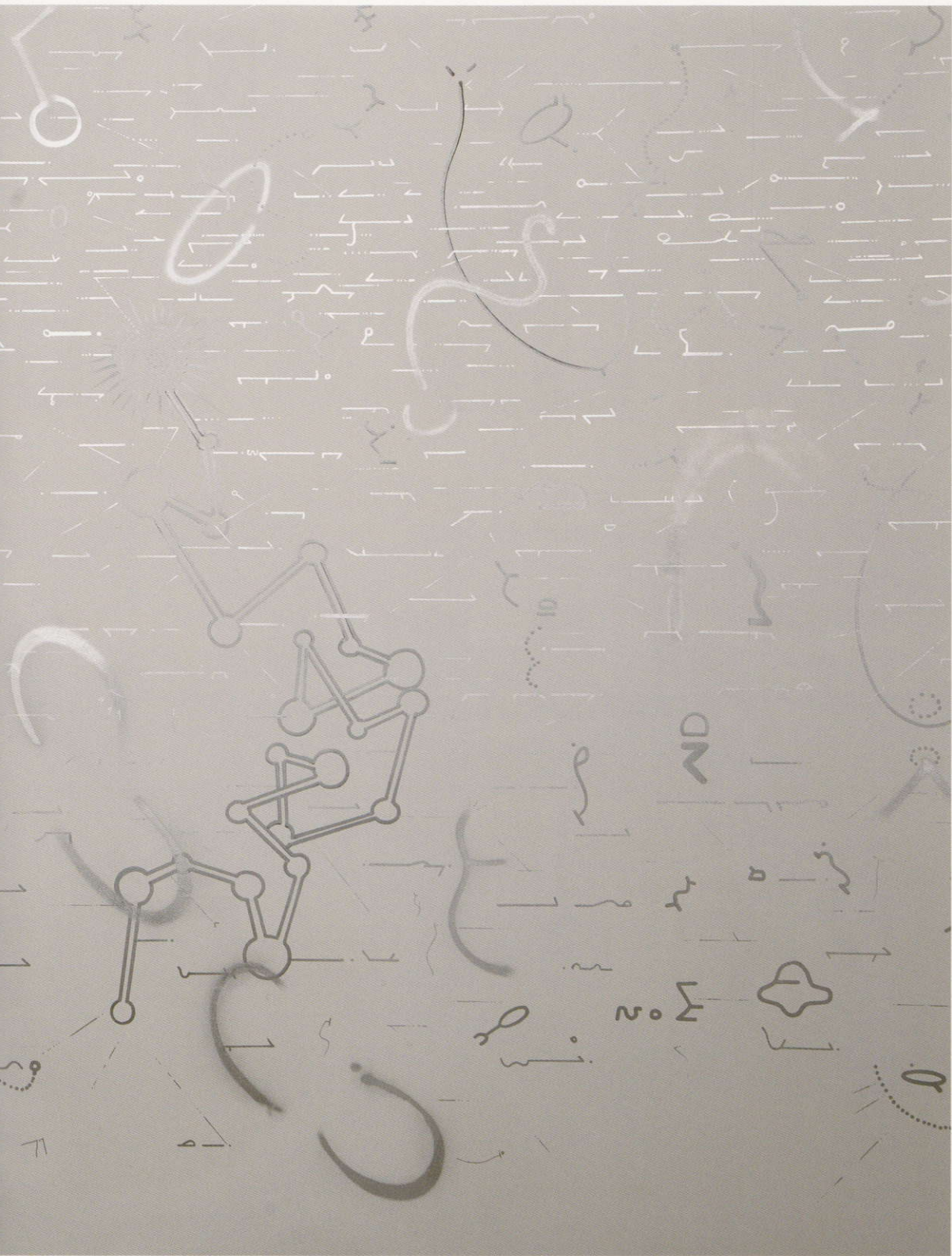


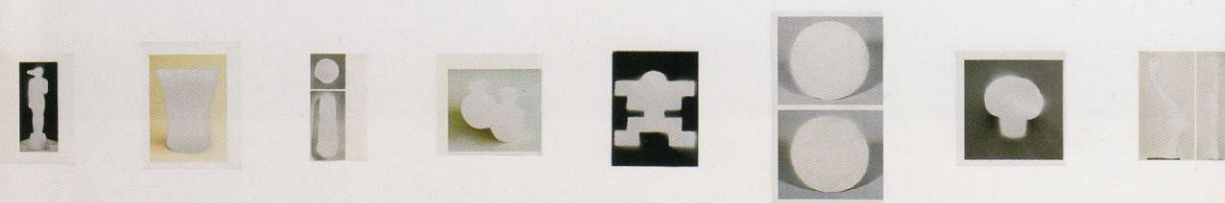
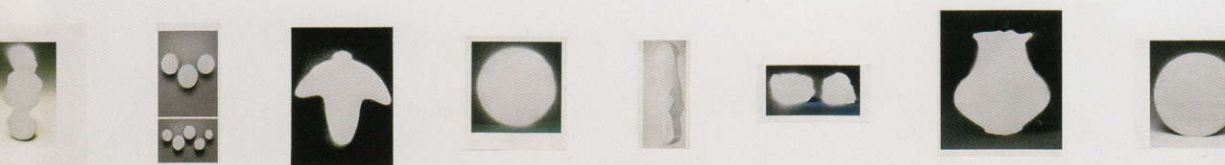
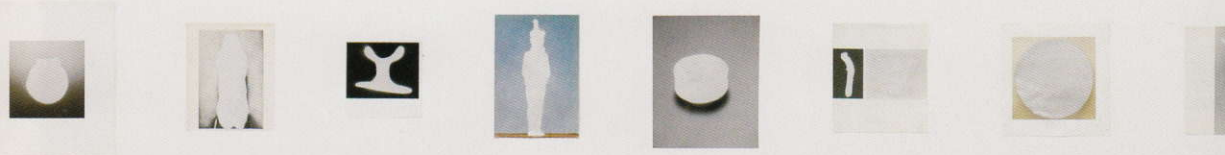
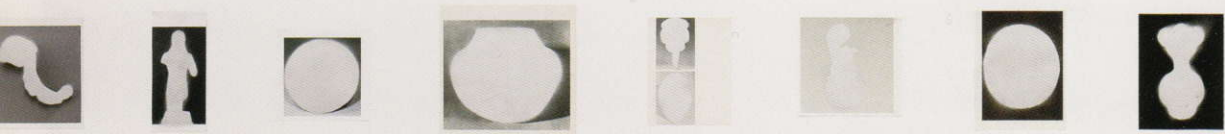
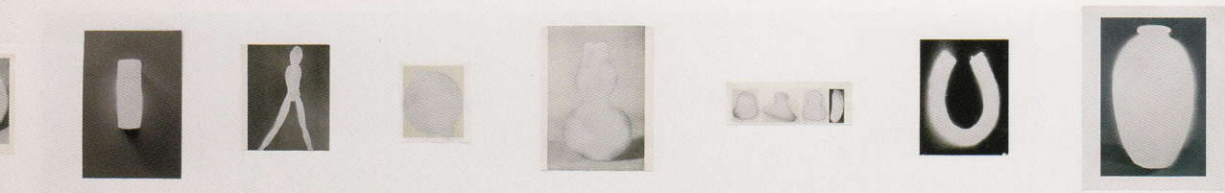


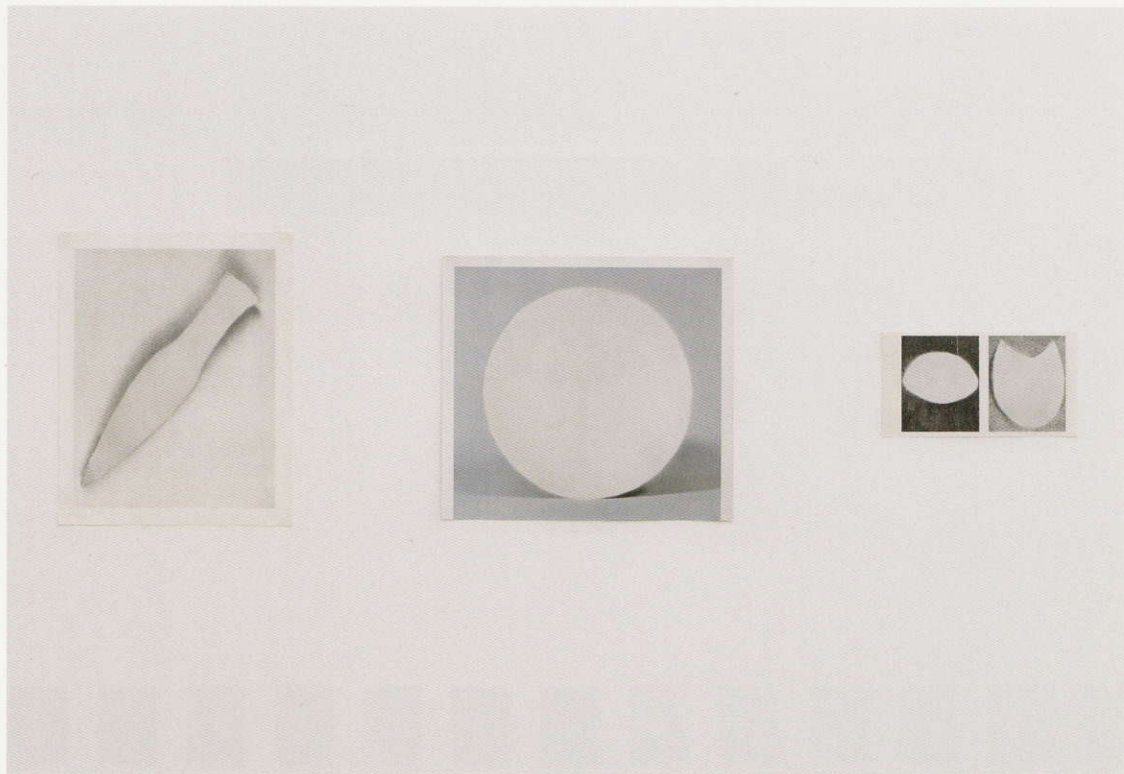




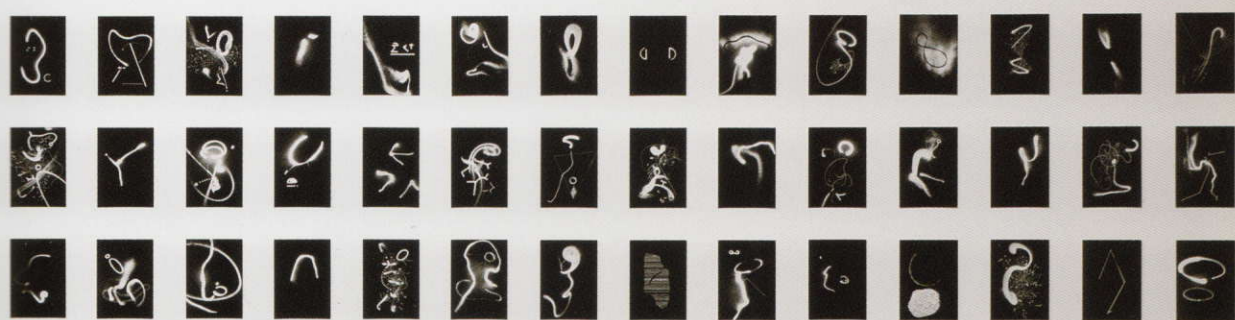


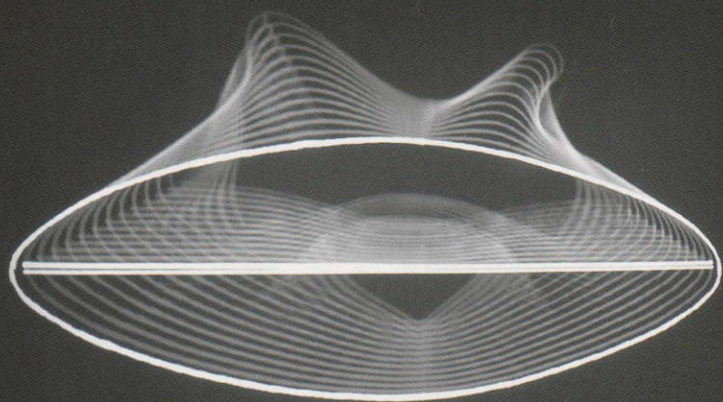




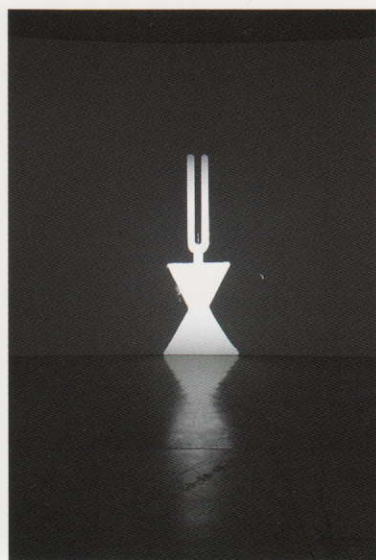
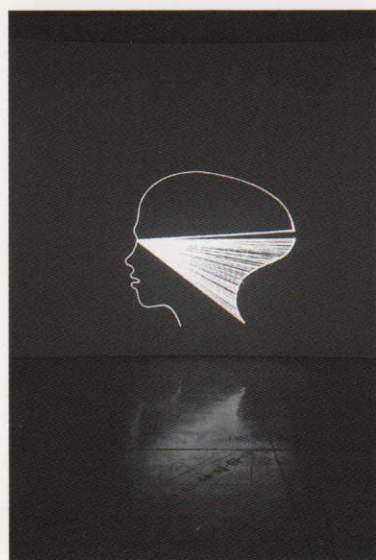
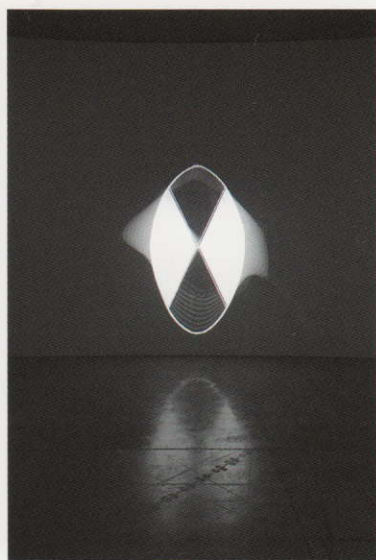
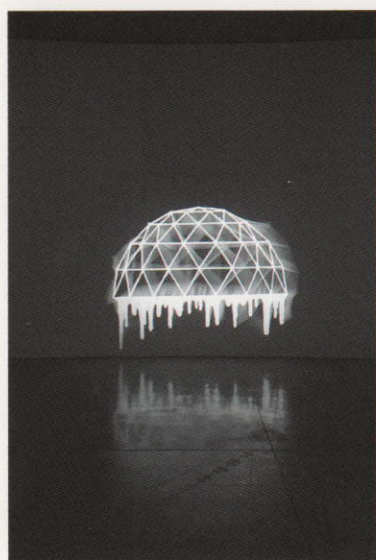
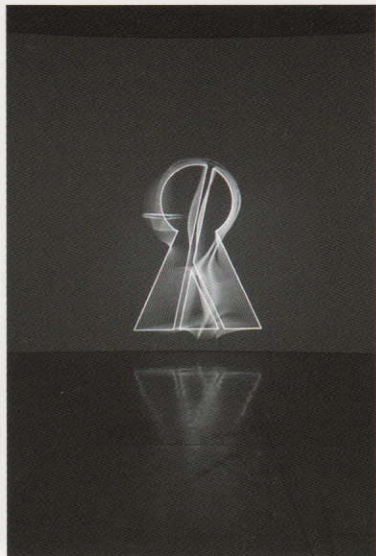
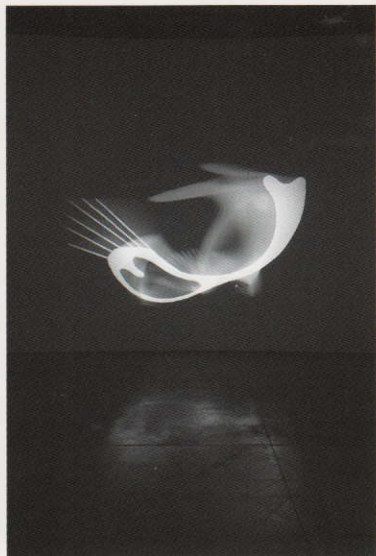
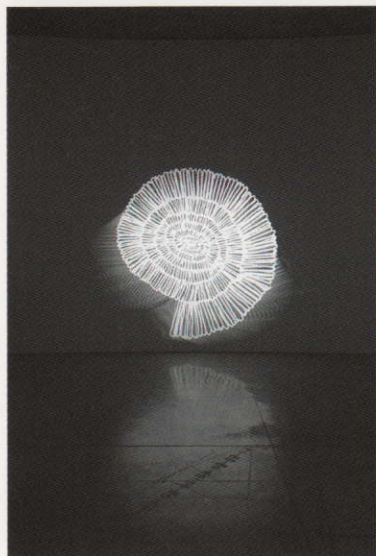


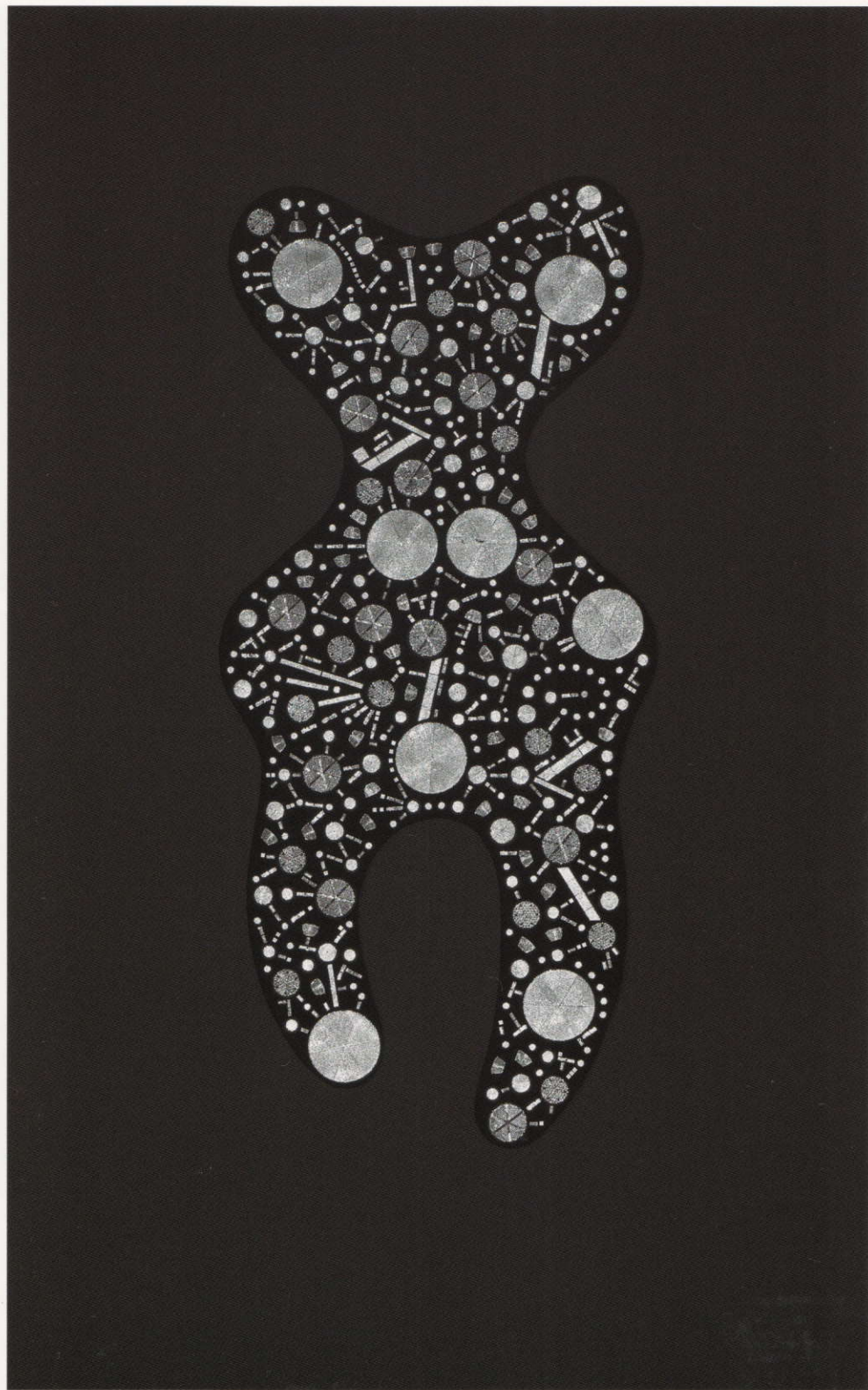


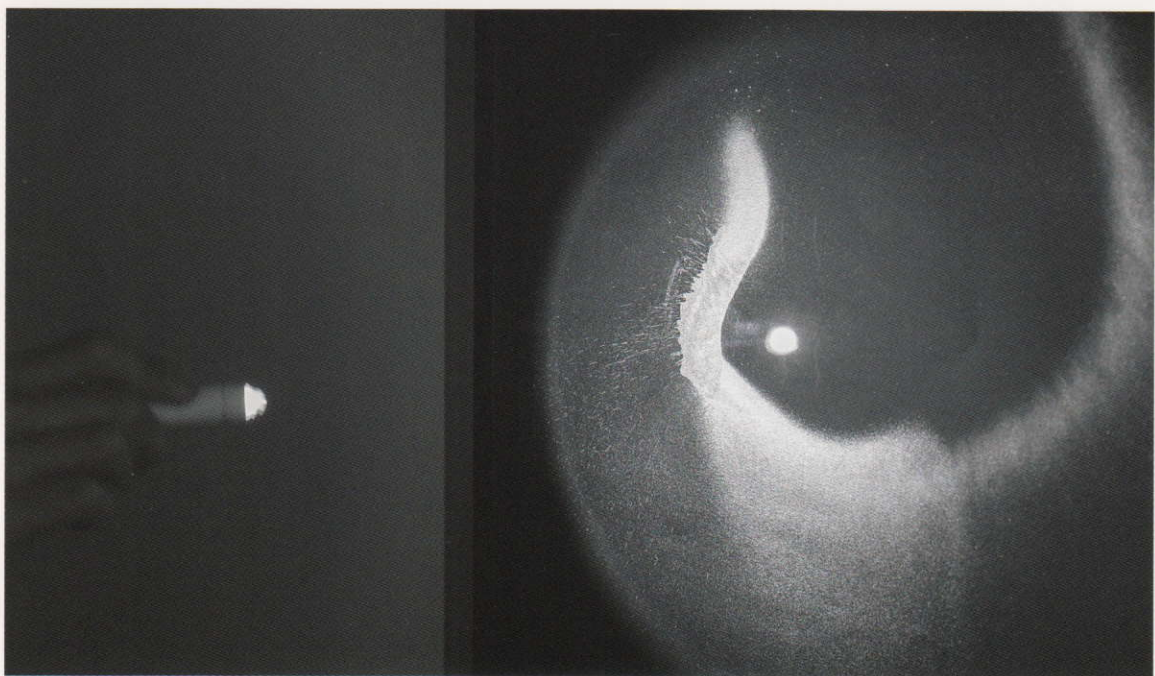












ギャラリー A | Gallery A

歩く言語

2015年 | シルバースプレー、シルバークイン

w 55,000 × h 6,000mm

マーカーとスプレーによりシルバー一色で描かれた大壁画は、向かいの壁面上部の連続水平窓から差し込む光を反射する。壁面を眺めながら歩いていくと、光が追いかけてくるように、あるいは光を追いかけるように、視線の先にある部分が発光して見える。振り返るとその光は消え、確かな描線がある。水平のラインを基底として描かれた架空の楽譜のような無数のかたち達が、鑑賞者の視点の移動と呼応して、音楽的なリズムを生み出した。

circuit #06

2014年 | 紙にシルバークイン | w 1,140 × h 1,140mm

circuit #07

2014年 | 紙にシルバークイン | w 1,140 × h 1,140mm

画面中央の小さな点から始まり、どこかにありそうとどこにもない記号の断片が渦を巻き、銀河を形成するかのようには広がっている。展示室入口脇の壁面と、壁画の回廊を通った奥の壁面に、向かい合うように設置された2点の《circuit》は、対称的な形態となっており、回路の断面のようにも見える。時計回りにも、反時計回りにも見えるこの作品は、時間と空間の可逆性を表象している。

casting

2010-2015年 | 博物館のカatalog切り抜き、シルバースプレー
サイズ可変 | 91点

世界各地で入手した博物館のカatalogのページ上で、様々な遺物の輪郭をなぞり、切り抜いてステンシルを作成。そこにシルバーのスプレーを施すことで、かつてあった物が、輪郭と影だけを残してもとの記憶を消され、未知の物体のような輝きと立体感を伴って再び現れる。ものの痕跡の型をとってネガをポジに反転することで、新たなイメージを出現させるという行程は、金属による鋳造や、写真を現像するプロセスなどとも通底する。

GENZO (写真)

2014-2015年 | タイプCプリント

各 w127 × h178mm | 84点

黒い紙にシルバーのスプレーやマーカーで描いたドローイングを作家自身が撮影し、印画紙に転写した写真作品。一見すると、闇の中で光の現象を捉えた

長時間露光の写真や、印画紙上に直接ものを置いて感光させることで制作されたフォトグラムなどを想起させる。作家は、ネガティヴハンド(古代人が洞窟の壁面に手を置き、その上に顔料状にした炭を吹きかけて手型のネガを残したもの)をドローイングのひとつの起源と捉え、ネガポジ反転によってイメージを生成する技術を現代の写真の技法と重ね合わせることで、架空の写真とも言えるドローイング作品を制作した。

ギャラリー B | Gallery B

GENGA #001 - #1000 (video)

2009年 | ビデオ(28分10秒[ループ])

作家が2004年から6年の歳月をかけて描きためた1000枚のドローイング集「GENGA」を映像化した作品。A4のコピー用紙に描かれたマーカーによる記号のかたちがネガポジ反転され、デジタルな光の線となって壁面に投影される。それぞれのかたちは全く異なるものだが、モーフィングによって次のかたちへと変容し、連続していく。

GENZO #01

2014年 | 紙にシルバースプレー | w 550 × h 770mm

GENZO #02

2014年 | 紙にシルバースプレー | w 550 × h 770mm

真っ暗なトンネル内部に黒い紙とシルバースプレーを持ち込み、何も見えない状況の中で瞬発的に描いた作品。偶然性に任せてスプレーを吹きかけるという行為によって、作家自身の身体の動きの軌跡が、そのままシルバーの飛沫となって紙の上に刻印される。これは、洞窟の暗闇の中で描かれたネガティヴハンドの現代的メタファーでもあり、暗室でネガフィルムを現像する写真の行程とも近似するところがある。「GENZO」というタイトルには、幻像や原像という意味も含まれている。

鍵穴

2015年 | 反射板、木製パネル | w 1,180 × h 2,650mm

路上の交通標識や、自転車などにも用いられる反射板を用いた作品。円形や四角形の大きさが異なる多数の反射板を直感的に配置することで構成される。光を向けるとその光源に対して真っすぐ反射し、夜の道路を車で走っている時のように鑑賞者の網膜に光の残像を残す。象徴的な背景のかたちと相まって、別の時空へとつながる鍵穴のように、あるいは自らが発光する未知の生命体にも見えてくるだろう。



関連イベント

鈴木ヒラクライブドローイング&トーク
2015年5月3日[日] 14:00-16:00

ギャラリーツアー
2015年5月9日[土] 14:30-15:30

暗号ツアー
2015年4月26日[日] 14:30-16:30

Related Events

Hiraku Suzuki Live Drawing & Talk
2:00 pm - 4:00 pm, May 3, 2015

Gallery Tour
2:30 pm - 3:30 pm, May 9, 2015

The Code Tour
2:30 pm - 4:30 pm, April 26, 2015

Gallery A

Walking Language

2015, Silver spray paint, Silver ink,
w55,000 × h 6,000 mm

Walking Language is drawn entirely in silver using markers and spray paint as a mural that reflects the light through a band of windows on the opposite wall. Streaks of light follow viewers' gaze as they walk along the wall. Or perhaps the viewer is the one following the light. Turn around and the light is gone, but a definite line remains. Infinite shapes derived from the work's horizontal lines form an imaginary musical score of light that keeps rhythm with the movement of the viewer's gaze.

circuit #06

2014, Silver ink on paper, w1,140 × h1,140 mm

circuit #07

2014, Silver ink on paper, w1,140 × h1,140 mm

Fragments of signs spiral outward from a small, central nucleus as if to form their own galaxy. Somehow their nonsensical shapes seem familiar enough to be anywhere. The circuit pieces face each other—one in the corner wall near the gallery entrance and the other on the back wall of the gallery—to form a symmetrical configuration. They appear to unfurl in a counter-clockwise manner, like the cross-section of a swirling circuit that represents the reversible nature of time and space.

casting

2010-2015, Cutout from museum catalogues, Silver spray paint, Dimension Variable, 91 pieces
Suzuki cuts out stencils of artifacts found in the pages of museum catalogues he has gathered from secondhand bookshops around the world. He then sprays silver paint over them until only shadows and silhouettes of the artifacts remain. Their memories are erased. At the same time, they reappear with the radiance of some unknown three-dimensional object. Similar processes of casting molds and negative inversion to produce new images are both commonly seen in metalwork and photography.

GENZO (photo)

2014-2015, C-Type prints,
w127 × h178 mm (each), 84 pieces

In *GENZO (photo)*, Suzuki photographs his silver drawings of marker and spray paint on black paper and renders them on photographic paper. At first glance, they remind the viewer of long-exposure photographs that capture light phenomena in the dark or photograms made by placing objects directly on light-sensitive paper. The artist interprets

prehistoric hand stencils—and negative hand art (stenciled negatives made by placing one's hand on a cave wall and projecting charcoal pigment onto it) in particular—as one origin of drawing. By combining digital photographic techniques with his inversion of negative images, Suzuki crafts his artwork—a drawing or, more precisely, a fictional photograph.

Gallery B

GENGA #001 - #1000 (video)

2009, Video (28 min 10 sec [loop])

GENGA #001 - #1000 (video) is a video adaption of *GENGA*, a collection featuring 1,000 of the artist's drawings completed over a six-year period from 2004. Shapes of signs are written in black marker on A4-sized Xerox paper, whose colors are then inverted and projected on the wall as digital beams of light. Each of their shapes varies entirely, but together they form a series in which signs morph from one shape to the next.

GENZO #01

2014, Silver spray paint on paper, w550 × h770 mm
GENZO #02

2014, Silver spray paint on paper, w550 × h770 mm

GENZO #01 and *GENZO #02* are both impromptu works drawn on black paper with silver spray paint in a pitch-black tunnel where the artist was unable to see. The conscious act of leaving the drawing to chance preserves a silver trail of the artist's body movements on paper. This works are a modern metaphor for prehistoric negative hands, which were created in dark caves. They also closely resemble the process of developing negative film in a darkroom. The title, *GENZO*, is a homonym with the Japanese words that mean "illusion" and "original image."

Keyhole

2015, Reflector on wooden panel,
w1,180 × h2,650 mm

Keyhole utilizes the circular and rectangular reflective strips often seen on traffic signs and bicycles in an improvisational composition. They reflect light directly back at the source, leaving an afterimage on the retinas of the viewer, producing an effect similar to driving at night. Together with the shape of the symbolic background, they begin to look like an unknown bioluminescent life form or a keyhole to another dimension.

Try shining an LED handheld flashlight at *Keyhole*, located in the back of the gallery, at eye level from different points throughout the gallery. Additionally, try turning on your flash or use a strobe light when taking photos of the artwork.

鈴木ヒラク

〔すずき・ひらく〕

1978年生まれ。"描く"という行為を主題に、平面・インスタレーション・壁画・映像・パフォーマンス・彫刻など多岐にわたる制作を展開。時間や空間の生成と変容の方法として、ドローイングの領域を拡張し続けている。様々な音楽家とのセッションによるライブドローイング、アニメーションやコム・デ・ギャルソンとのコラボレーションも行っている。著書に『GENGA』、『鉱物探し』。

<http://hirakusuzuki.com/>

略歴

- 1978年 宮城県生まれ 神奈川県出身
- 2001年 武蔵野美術大学映像学科卒業
- 2008年 東京芸術大学大学院美術研究科修了
- 2011年 トーキョーワンダーサイトの助成によりロンドン芸術大学チェルシー校に滞在
- 2011-2012年 アジアン・カルチュラル・カウンシル(ACC)の助成によりニューヨーク滞在
- 2012-2013年 ボーラ芸術振興財団の助成によりベルリン滞在

個展

- 2015年 「言語と空間 vol.1 鈴木ヒラク『あなたの記号』」 青森公立大学国際芸術センター青森[ACAC]、青森
- 2013年 「Excavated Reverberations」 Daiwa Foundation、ロンドン、UK
- 2011年 「Glyphs of the Light」 WIMBLEDON space、ロンドン、UK
- 2010年 「U」 island MEDIUM、東京
「GENGA and Recent Drawings」 Galerie du Jour、パリ、フランス
- 2008年 「NEW CAVE」 トーキョーワンダーサイト渋谷、東京
- 2006年 「Dig」 Galerie du Jour、パリ、フランス
- 2004年 「NAZO」 UPLINK ギャラリー、東京
- 2003年 「Hiraku Suzuki」 INAX ギャラリー2、東京
- 2000年 「bacteria sign」 ギャラリーフレスカ、東京

グループ展

- 2015年 「Think Tank Labトリエンナーレ」 ヴロツロフ、ポーランド
「5x3」 Kunstraum Düsseldorf、デュッセルドルフ、ドイツ
「COSMOS/INTIME」 パリ日本文化会館、パリ、フランス
「TRAITS d'esprit」 Galerie du Jour、パリ、フランス
- 2014年 「国東半島芸術祭レジデンスプロジェクト『希望の原理』」 旧香々地町役場、大分
「バンクーバー・トリエンナーレ」バンクーバー、カナダ
「DRAWING NOW PARIS」 the Carreau du Temple and Espace Communes、パリ、フランス
- 2013年 「日産アートアワード2013」 BankART Studio NYK、神奈川
「高橋コレクション・マインドフルネス」 霧島アートの森、鹿児島/札幌芸術の森美術館、北海道
「DRAWING NOW PARIS」 Carrousel du Louvre、パリ、フランス
「Wall Art Festival Warli」 Jivan Sikshan Mandir Ganjad、ダハヌ、インド
- 2012年 「ソニーエレクトロニクス、そして叡智」 金沢21世紀美術館、石川
「SIDE CORE」 BA-TSU GALLERY、東京
「バンタ・レイ | 小金沢健人・鈴木ヒラク」 TALION Gallery、東京
「One And Many」 Location One、ニューヨーク、USA
- 2011年 「地表から遠く離れて | 鈴木ヒラク・逢坂卓郎」 TALION Gallery、東京
「DRAWING — 線を描くという営為」 island MEDIUM、東京
- 2010年 「六本木クロッシング2010展：芸術は可能か？」 森美術館、東京
- 2009年 「House of Art」 Hotel Central、サンパウロ、ブラジル
「愛についての100の物語」 金沢21世紀美術館、石川
「Re: Membering - Next of Japan」 Gallery LOOP、ソウル、韓国
「VOCA展 2009」 上野の森美術館、東京
「Between Site & Space」 ARTSPACE SYDNEY Visual Arts Centre、シドニー、オーストラリア
- 2008年 「FIXMIXMAX! 2 — 現代アートのフロントライン」 札幌宮の森美術館、北海道
「MIMITOME」 TOUSCENE、スタバンガー、ノルウェー

- 2008年 「都市のディオラマ」トーキョーワンダーサイト渋谷、東京
2004年 「Tokyo Style in Stockholm」Karl Johans Torg、ストックホルム、スウェーデン
2002年 「Tokyo Art Jungle」JR山手線/東京国際フォーラム、東京

主なライブドローイング・パフォーマンス

- 2014年 「みちのおくの芸術祭 山形ビエンナーレ2014」文翔館、山形(鈴木昭男と)
金沢21世紀美術館、石川(スガダイローと)
2013年 金沢21世紀美術館、石川(植野隆司と)
2012年 Printed Matter、ニューヨーク、USA (Loren Connors, Julien Langendorffと)
2011年 Location One、ニューヨーク、USA (Raz Mesinaiと)
WIMBLEDON theatre、ロンドン、UK
TOU SCENE、スタノバンガー、ノルウェイ (Kitchen Orchestra・永戸鉄也と)
2010年 Agnes B. CMC、パリ、フランス
Super Deluxe、東京(カジワラトシオと)
森美術館、東京(Shing02と)
2009年 金沢21世紀美術館、石川(Shing02と)
2008年 TOU SCENE、スタノバンガー、ノルウェイ (灰野敬二・中原昌也・びかちゅー・生西康典・永戸鉄也と)
2007年 UPKINK FACTORY、東京(煙巻ヨーコ・伊東篤宏と)
2006年 ギャラリードゥジュール、パリ、フランス
2005年 UPKINK FACTORY、東京(山川冬樹・KUJUNと)
高輪プリンスホテル貴賓館、東京
2004年 Kulturhuset、ストックホルム、スウェーデン(Shing02・梅田宏明と)
2003年 札幌護国神社、北海道
Super Deluxe、東京(生西康典・植野隆司と)
2000年 つつじの里児童遊園、東京(nibo・岩井主税と)

作品集

- 2010年 「鉱物探し」トーキョーカルチャート by ビームス
2010年 「GENGA」河出書房新社

コミッションワーク

- 2014年 COMME des GARÇONS HOMME PLUS (川久保玲とのコラボレーション)
2013年 ZOZO BASE (壁画)
COMME des GARÇONS SHIRT, Paris Collection (川久保玲とのコラボレーション)
2012年 Agnes b. 青山店 (ART FACADE PROJECT Vol.5)
2011年 COMME des GARÇONS 青山/京都/ロンドン/香港/ソウル/北京店 (内装/川久保玲とのコラボレーション)
2010年 COMME des GARÇONS 北京店 (内装/川久保玲とのコラボレーション)
Agnes b. HOMME, Paris Collection (アニエスベール本社壁画/ライブドローイング)
2009年 HIRAKU SUZUKI pour Agnes b. 2009 (アニエスベールとのコラボレーション)
2008年 HIRAKU SUZUKI pour Agnes b. 2008 (アニエスベールとのコラボレーション)
Agnes b. voyage 表参道店 (ART FACADE PROJECT)

コレクション

- 金沢21世紀美術館、石川
Agnes B. Collection、パリ、フランス
ロンドン芸術大学、ロンドン、UK
高橋コレクション、東京
日産アートコレクション、神奈川

Hiraku Suzuki

Born in 1978. A major recurring motif of SUZUKI's work is the act of drawing. His varied portfolio of productions includes two-dimensional works, installations, murals, video, performance, and sculpture. Using drawing as a method to generate and transform time and space, SUZUKI continues to push the boundaries of his medium. He has held live drawing sessions with numerous musicians and collaborated with entities like agnès b. and COMME des GARÇONS. SUZUKI is also the author of drawing books such as *GENGA* and *Looking for Minerals*.

<http://www.hirakusuzuki.com/>

Education

- 2008 MA in Fine Arts (Inter Media Arts), Tokyo National University of Fine Arts and Music, Tokyo
- 2001 BA in Fine Arts (Imaging Arts and Sciences), Musashino Art University, Tokyo

Awards and residencies

- 2012-2013 Pola Art Foundation Fellowship, Berlin, Germany
- 2011-2012 Asian Cultural Council (ACC) Fellowship, New York, USA
- 2011 Exchange program at Chelsea College of Art & Design, London, UK
- 2009 - Redbull House of Art, Sao Paulo, Brazil
- 2009 ARTSPACE, Sydney, Australia

Solo Exhibitions

- 2015 *Langue and Space vol.1 Hiraku Suzuki: Signs of Faraway*, Aomori Contemporary Art Centre, Aomori, Japan
- 2013 *Excavated Reverberations*, Daiwa Foundation, London, UK
- 2011 *Glyphs of the Light*, WIMBLEDON space, London, UK
- 2010 *U, island MEDIUM*, Tokyo, Japan
GENGA and Recent Drawings, Galerie du Jour, Paris, France
- 2008 *NEW CAVE*, Tokyo Wonder Site Shibuya, Tokyo
- 2006 *dig*, Galerie du Jour, Paris, France
- 2004 *NAZO*, Uplink Gallery, Tokyo, Japan
- 2003 *Hiraku Suzuki*, INAX Gallery, Tokyo, Japan
- 2000 *bacteria sign*, Gallery Fresca, Tokyo, Japan

Group Exhibitions

- 2015 *Think Tank Lab Triennale*, Wrocław, Poland
5x3, Kunstraum Düsseldorf, Düsseldorf, Germany
COSMOS/INTIME, Maison de la culture du Japon à Paris, Paris, France
TRAITS d'esprit, Galerie du Jour Agnès b., Paris, France
- 2014 *Kunisaki Art Festival – Residence Project: The Principle of Hope*, Former Kakadi town hall, Oita, Japan
Vancouver Biennale, Vancouver, Canada
DRAWING NOW PARIS, the Carreau du Temple and Espace Communes, Paris, France
- 2013 *NISSAN ART AWARD 2013*, BankART Studio NYK, Kanagawa, Japan
TAKAHASHI COLLECTION - Mindfulness!, Kirishima Open-Air Museum, Kagoshima, Japan / Sapporo Art Museum, Hokkaido, Japan
DRAWING NOW PARIS, Carrousel du Louvre, Paris, France
Wall Art Festival Warli, Jivan Sikshan Mandir Ganjad, Dahanu, India
- 2012 *Son et Lumière - Material, Transition, Time, and wisdom*, 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa, Ishikawa, Japan
Panta Rhei – Hiraku Suzuki and Takehito Koganezawa, TALION Gallery, Tokyo, Japan
One And Many, Location One, New York, USA
- 2011 *Far Away From the Surface – Hiraku Suzuki and Takuro Osaka*, TALION Gallery, Tokyo, Japan
DRAWING, Island MEDIUM, Tokyo, Japan
- 2010 *Roppongi Crossing 2010*, Mori Art Museum, Tokyo, Japan
- 2009 *Redbull House of Art*, Hotel Central, Sao Paulo, Brazil
Hundred Stories about Love, 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa, Ishikawa, Japan
Re:Membering – Next of Japan, Gallery LOOP, Seoul, Korea
VOCA - the vision of contemporary art, The Ueno Royal Museum of Art, Tokyo, Japan
Between Site & Space, ARTSPACE SYDNEY Visual Arts Centre, Sydney, Australia

- 2008 *FIXMIXMAX! 2 the frontline of contemporary art*, Miyanomori Art Museum, Hokkaido, Japan
MIMITOME, TOU SCENE, Stavanger, Norway
Diorama of the City, Tokyo Wonder Site Shibuya, Tokyo, Japan
- 2004 *Tokyo Style in Stockholm*, Karl Johans Torg, Stockholm, Sweden
- 2002 *Tokyo Art Jungle*, JR Yamanote-Line/Tokyo International Forum, Tokyo, Japan

Selected Live Drawing Performance

- 2014 *Yamagata Biennale*, Bunsyo-kan, Yamagata, Japan (with Suzuki Akiko)
 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa, Ishikawa, Japan (with Sugadairo)
- 2013 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa, Ishikawa, Japan (with Ueno Takashi)
- 2012 Printed Matter, New York, USA (with Loren Connors and Julien Langendorf)
- 2011 Location One, New York, USA (with Raz Mesinai)
 WIMBLEDON theatre, London, UK
 TOU SCENE, Stavanger, Norway (with Kitchen Orchestra and Nagato Tetsuya)
- 2010 Agnes B. CMC, Paris, France
 Super Deluxe, Tokyo, Japan (with Kajiwaru Toshio)
 Mori Art Museum, Tokyo, Japan (with Shing02)
- 2009 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa, Ishikawa, Japan (with Shing02)
- 2008 TOU SCENE, Stavanger, Norway
 (with Haino Keji, Nakahara Masaya, Picachu, Ikunishi Yasunori and Nagato Tetsuya)
- 2007 Uplink Factory, Tokyo, Japan (with Kemumaki Yoko and Ito Atsuhiko)
- 2006 Galerie du Jour, Paris, France
 GRID605, Tokyo, Japan
- 2005 Media Park Spica, Hokkaido, Japan
 Uplink Factory, Tokyo, Japan (with Yamakawa Fuyuki and KUJUN)
 Takanawa Prince Hotel, Tokyo, Japan
- 2004 Uplink Gallery, Tokyo, Japan
 Kulturhuset, Stockholm, Sweden (with Shing02 and Umeda Hiroaki)
- 2003 Super Deluxe, Tokyo, Japan (with Ikunishi Yasunori and Ueno Ryuji)
- 2000 Public Park Tsutsujinosato, Tokyo, Japan (with nibo and Iwai Chikara)

Publications

- 2010 *Looking For Minerals*, TOKYO CULTUART by BEAMS
 GENGA, Kawade Shobo Shinsha (Supported by Agnes B.)

Comissioned Works

- 2014 COMME des GARÇONS HOMME PLUS (collaboration with Rei Kawakubo)
- 2013 COMME des GARÇONS SHIRT (collaboration with Rei Kawakubo)
- 2012 Agnes b. Aoyama "ART FACADE PROJECT Vol.s"
- 2011 COMME des GARÇONS Aoyama/ Kyoto/ London/ Hong Kong/ Seoul/ Beijing
 (collaboration with Rei Kawakubo)
- 2010 COMME des GARÇONS Beijing IT MARKET (collaboration with Rei Kawakubo)
 Agnes b. HOMME Paris Collection (wall drawings / live drawing performance)
- 2009 HIRAKU SUZUKI pour Agnes b.2009 (collaboration with Agnes b.)
- 2008 HIRAKU SUZUKI pour Agnes b.2008 (collaboration with Agnes b.)
 Agnesb. voyage Omotesando (ART FACADE PROJECT)

Collections

- 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa, Ishikawa, Japan
- Agnes B. Collection, Paris, France
- University of the Arts, London, London, UK
- Takahashi Collection, Tokyo, Japan
- NISSAN ART COLLECTION, Kanagawa, Japan

展覧会

青森公立大学国際芸術センター青森 [ACAC]
言語と空間 vol.1 鈴木ヒラク「あなたの記号」

会期

2015年4月18日[土] - 5月17日[日]

10:00 - 18:00

アーティスト

鈴木ヒラク

スタッフ

[テクニカルサポート]

椎啓、飛嶋翔

[総務・サポート]

田中紀子、近藤由紀、齊藤麻由美、山内麻未

[教育普及]

金子由紀子

[ボランティアスタッフ]

豊澤千幸、柴山奈津美

[翻訳]

アレックス・クイン

[記録写真]

小山田邦哉

[デザイン]

木村稔将

[企画]

服部浩之

主催

青森公立大学国際芸術センター青森 [ACAC]

協力

AIRS、青森公立大学芸術サークル、ACAC学生サポーター

カタログ

写真

小山田邦哉、国際芸術センター青森

執筆

鈴木ヒラク、服部浩之

翻訳

アレックス・クイン

デザイン

木村稔将

編集

服部浩之

発行日

2015年12月30日

発行所

青森公立大学 国際芸術センター青森 [ACAC]

〒030-0134

青森市合子沢字山崎 152-6

TEL: 017-764-5200 FAX: 017-764-5201

Email: acac-1@acac-aomori.jp

印刷

青森オフセット印刷株式会社

Exhibition

Aomori Contemporary Art Centre [ACAC],

Aomori Public University

Langue and Space vol.1

Hiraku Suzuki Signs of Faraway

schedule

10:00 am - 6:00 pm, April 18 - May 17, 2015

Artist

Hiraku Suzuki

Staff

[Technical support]

Shii Kei, Tobishima Kakeru

[Administration & Support]

Tanaka Noriko, Kondo Yuki, Saito Mayumi, Yamauchi Mami

[Educational Program]

Kaneko Yukiko

[Volunteer]

Toyosawa Chiyuki, Shibayama Natsumi

[Translated by]

Alex Queen

[Photographed by]

Oyamada Kuniya

[Graphic design]

Kimura Toshimasa

[Curated by]

Hattori Hiroyuki

Organized by

Aomori Contemporary Art Centre [ACAC],

Aomori Public University

In cooperation with

AIRS, APU Art Club, ACAC Student Supporters

Catalogue

Photographed by

Oyamada Kuniya, Aomori Contemporary Art Centre

Authors

Hiraku Suzuki,

Hattori Hiroyuki

Translated by

Alex Queen

Graphic design

Kimura Toshimasa

Edited by

Hattori Hiroyuki

Published Date

December 30, 2015

Published by

Aomori Contemporary Art Centre [ACAC],

Aomori Public University

152-6, Yamazaki, Goshizawa, Aomori, 030-0134, Japan

TEL: 017-764-5200 FAX: 017-764-5201

Email: acac-1@acac-aomori.jp

Printed in Japan by

Aomori Offset Printing Co., Ltd

